



「○○くんのおかあさん」

エプロン通信員 木村 美乃

「○○くんのおかあさん」と呼ばれるようになって数年が経ちます。息子が生まれて、保育園に通いだす頃からそう呼ばれるようになったのですが、この呼び方なかなか気に入っています。

さてある休日、息子を連れて公園に行ったときのことです。しばらく砂場で遊んでいると、次第に数名の子が集まってきました。子供たちはすぐにうちとけて、一緒に砂遊びを始めました。私を交えてのおしゃべりもはずみ、気がつくとも息子と同様に他の子たちも「ねえ、おかあさん」と私を呼ぶようになっていました。こうなると誰が親子か見た目にはわからない状態です。

近くにいた女性に「三人兄弟ですか？」と訊かれ、「いいえ、うちの子は向こうの小さい方です。他の子にはここで初めて会いました」と答え、互いに笑いました。その場が楽しくあたたかい空気に包まれたのでした。

私の子供時代には、友達のお母さんのことを「おばさん」と呼ん

でいたような気がします。最近はおばさんと呼ばれる機会はありません。周りを見ても、「○○くん（○○ちゃん）のおかあさん」という呼び方が広く使われているように思います。それはひとつの「最近の傾向」なのかもしれませんが、砂場でひとつコマのように、ほっとさせる何かがあります。子どもたちが心を開いて触れ合おうとしているから、そのような呼び方をするのでしょうか。お互いの距離がぐっと近くなるような気がして好きです。今度公園で、初めて会った子に「おかあさん」と呼ばれたら、また「はい」と言っ



岩村通俊の宜野湾視察

46

岩村通俊の宜野湾視察

一八七九（明治十二）年、明治政府の琉球処分によって沖縄県が誕生しました。それは、これまでの首里王府による王国制から、日本の一県としての始まりでもありました。しかし、政治的には大きな転換を迎えたとはいえ、そこに住む人びとの生活まで、すぐに変わるものではありませんでした。明治政府は沖縄へ役人を派遣し、環境や人びとの生活を視察させました。

作料の未納などで、人びとの厳しい状況を目の当たりにしました。後に沖縄県令（今の県知事）となった岩村は、当時の日本と清国、沖縄との関係や、明治政府の財政状況を含めて明治政府から指示を受け、旧慣改革を進めようとした前任の県令の方針を改め、旧慣温存の方針へと転換させました。

その人物の一人に岩村通俊（一八四〇～一九一五）がいました。岩村は高知県出身で、一八八三（明治十六）年に沖縄県政の監督を命ぜられて来県し、各地の実情を調査しました。宜野湾には二月十二日に、宜野湾間切番所内に併設された中頭役所を訪問し、翌日には普天間神宮を参詣しました。そこで間切役人から宜野湾の実情を伺いました。その内容は、役人の交代は旧来通りにしてほしいとか、人びとの生活苦に伴う首里・那覇への奉公の様子や小



宜野湾村役場(昭和10年、宇宜野湾) 村役場以前は間切番所がそこにあり、一時期は中頭役所も併設されていた。

「宜野湾市史」への問合せ

教育委員会文化課
☎ 八九三ー四四三ー

